

令和3年漁期イカナゴシンコ(新子)漁況予報

令和3年2月17日
兵庫県立農林水産技術総合センター
水産技術センター

1. 産卵親魚の調査結果

播磨灘北東部の鹿ノ瀬で、12月2日から12月28日にかけて延5回、文鎮漕ぎによる採集調査を実施した。

(1) 親魚密度

文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数は7.8尾で、平年値を下回り、昨年と同様低い値であった。年齢組成は1才魚が93.5%、2才魚以上が6.5%であった(表1)。

表1 親魚密度(文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数)

	1才魚	2才魚以上	全体
今年	7.3尾 (93.5%)	0.5尾 (6.5%)	7.8尾
昨年	5.0尾 (94.3%)	0.3尾 (5.7%)	5.3尾
平年	115.9尾 (87.6%)	16.4尾 (12.4%)	132.3尾

(平年:平成21~30年の10年間の平均値)

(2) 親魚の全長組成

親魚全体の平均全長は106.4mmで、昨年の108.6mmを下回った(図1)。

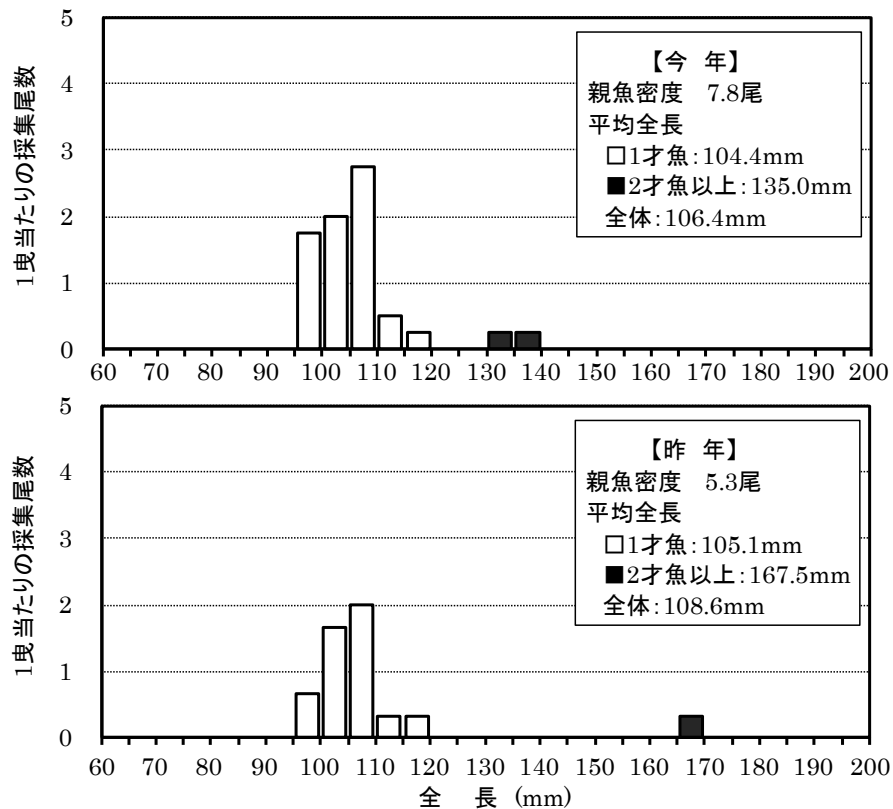


図1 親魚の全長組成

(3) 産卵量指数

今年の産卵量指数は 0.11 で、昨年と同様低い値であった（表 2）。

*産卵量指数：総産卵量の目安となる数値。1尾当たりの産卵量は親魚の大きさによって異なるため、毎年親魚密度と全長組成から算出しています。

表2 産卵量指数(昭和62(1987)年漁期の産卵量を1.00とした場合の相対値)

	1才魚	2才魚以上	全 体
今 年	0.09 (81.8%)	0.02 (18.2%)	0.11
昨 年	0.04 (66.7%)	0.02 (33.3%)	0.06
平 年	1.19 (69.2%)	0.53 (30.8%)	1.72

(平年：平成21～30年の10年間の平均値)

(4) 産卵盛期

今年の雌親魚の生殖腺（卵巣）熟度指数は、12月17日から12月28日にかけて減少した（図 2）。また17日の調査では産卵が始まっておらず、24日には半数が産卵を終えており、28日には大半の個体が産卵を終えていた。以上のことから、鹿ノ瀬における今年の産卵盛期は昨年よりも早いと考えられた。

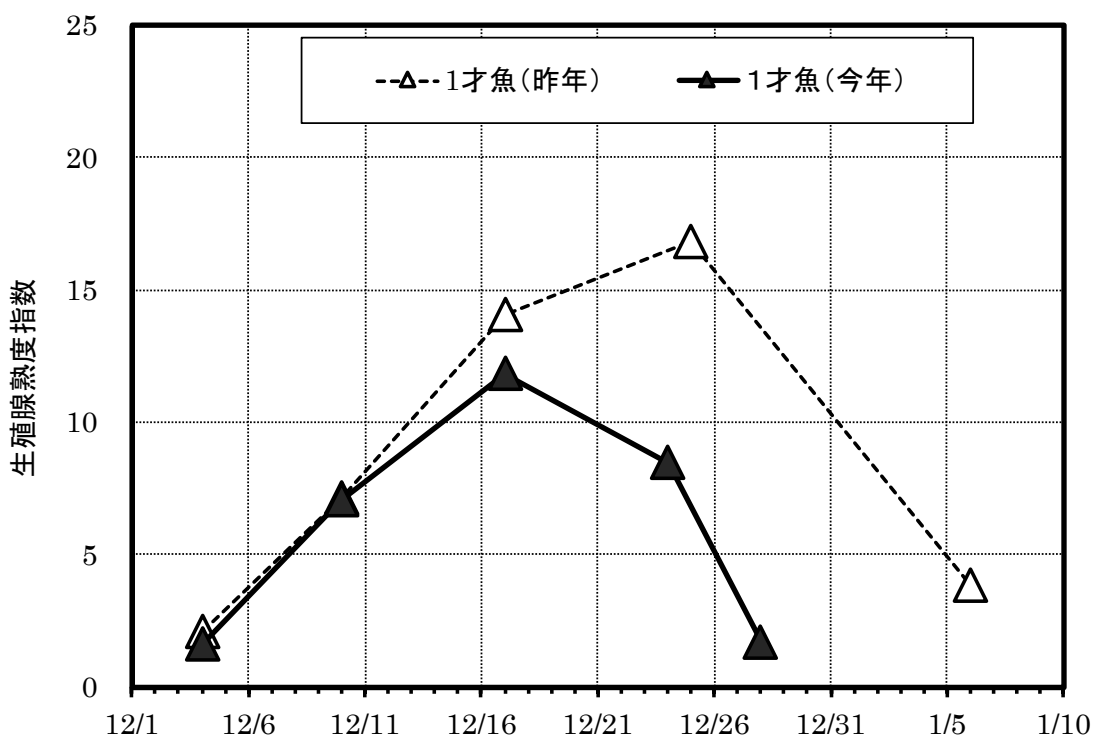


図 2 雌親魚の生殖腺熟度指数の変化

2. 稚子の調査結果

稚子の調査は1月20日、21日、22日に実施し、表層から底層までの往復傾斜曳き（口径60cmのボンゴネット使用）により採集した。

1地点当たりの平均採集尾数は、播磨灘が2.5尾（昨年：1.4尾）、大阪湾が3.5尾（昨年：1.1尾）、紀伊水道が1.1尾（昨年：0.6尾）であり（表3）、各海域とも分布量は低水準であった（図3）。

全長の平均値は、播磨灘が6.9mm（昨年7.6mm）、大阪湾が7.0mm（昨年7.0mm）、紀伊水道が7.9mm（昨年7.1mm）であった（図4～6）。

表3 海域ごとの稚子採集尾数平均値（1m³水柱当たりの尾数）

	播磨灘	大阪湾	紀伊水道
今年	2.5	3.5	1.1
昨年	1.4	1.1	0.6
平年	12.3	17.0	3.6

（平年：ボンゴネットによる調査を開始した平成24～31年の8年間の平均値）

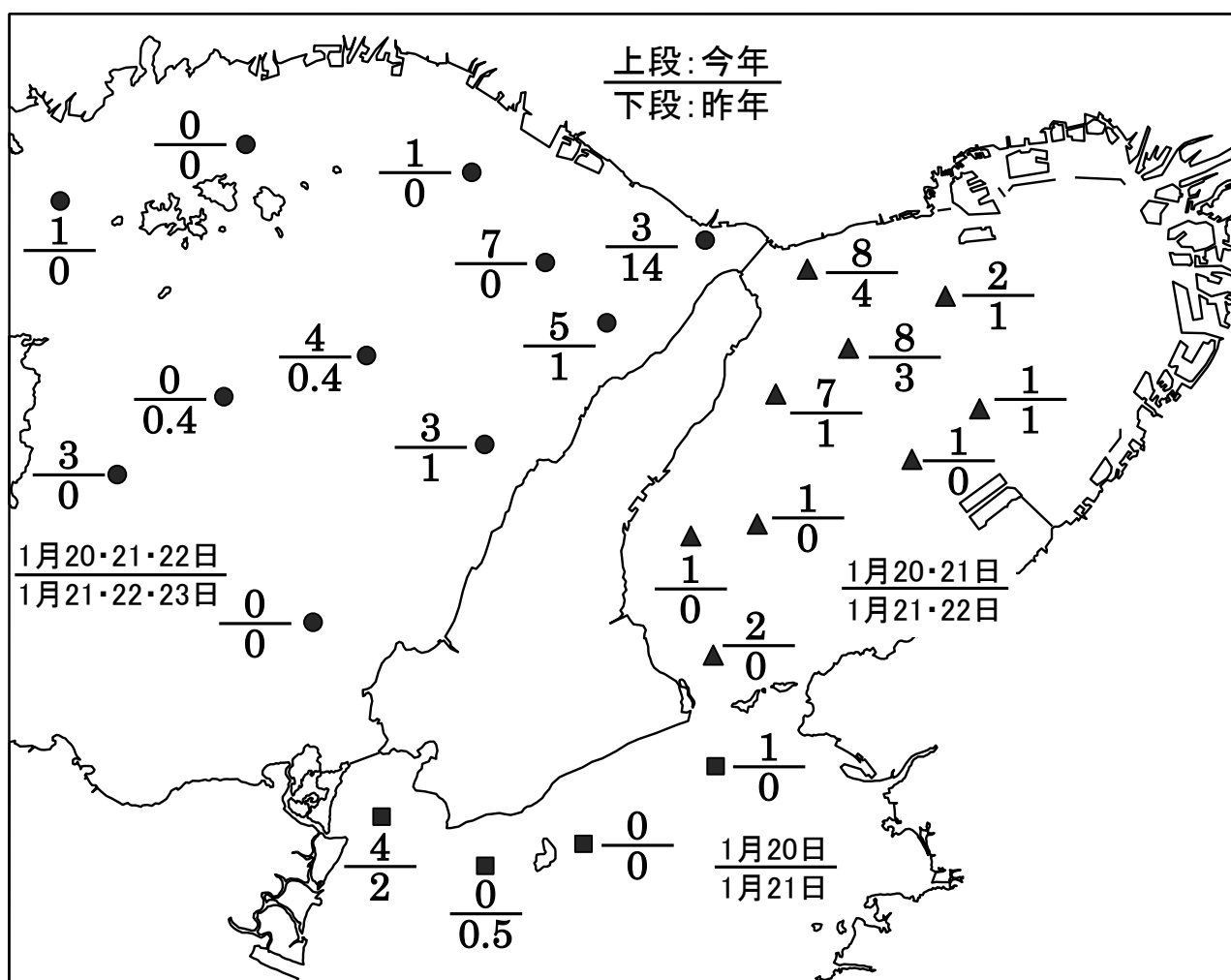


図3 稚子の採集尾数（1 m³水柱当たりの尾数）

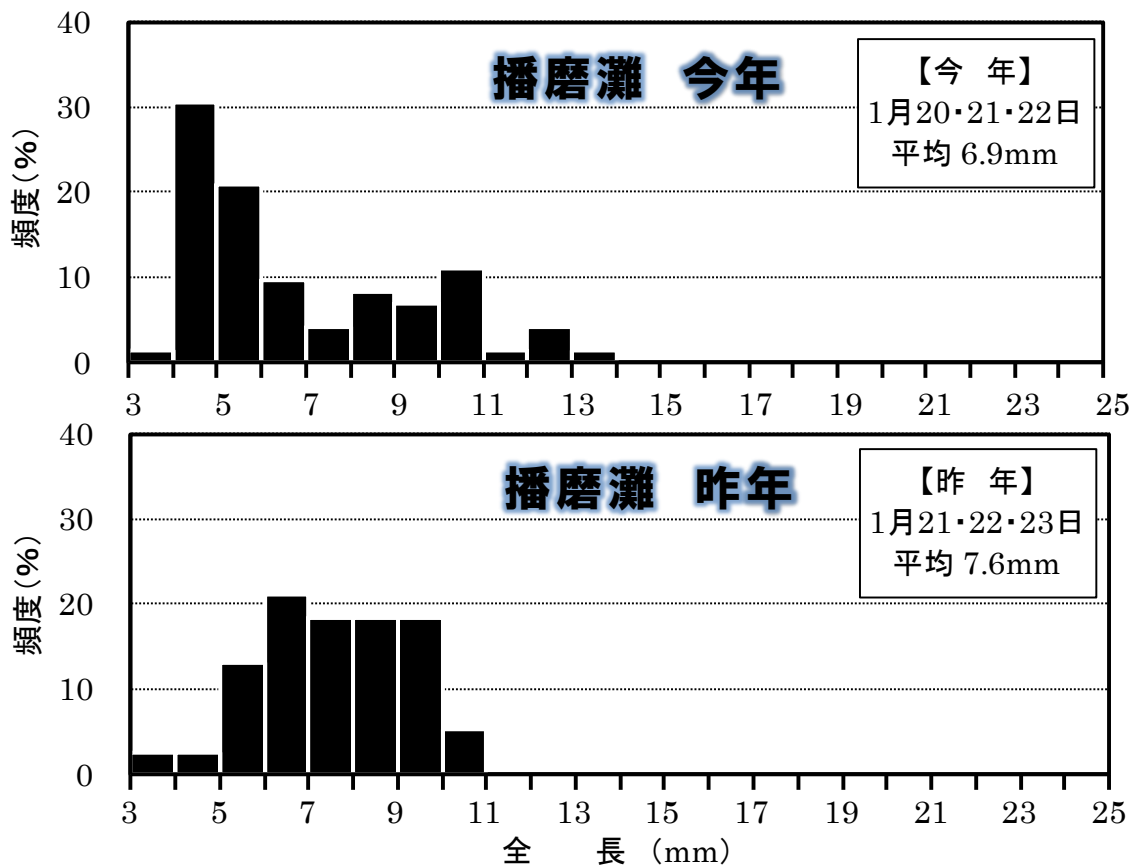


図4 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(播磨灘)

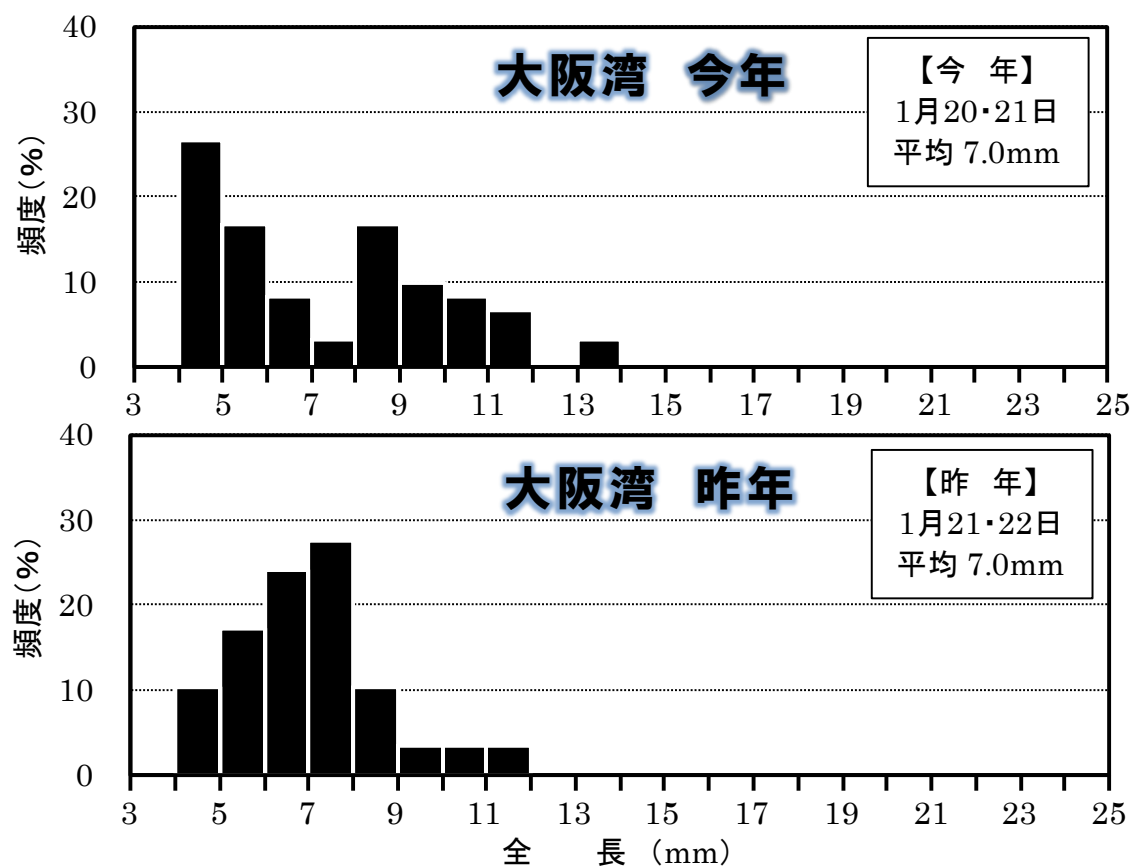


図5 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(大阪湾)

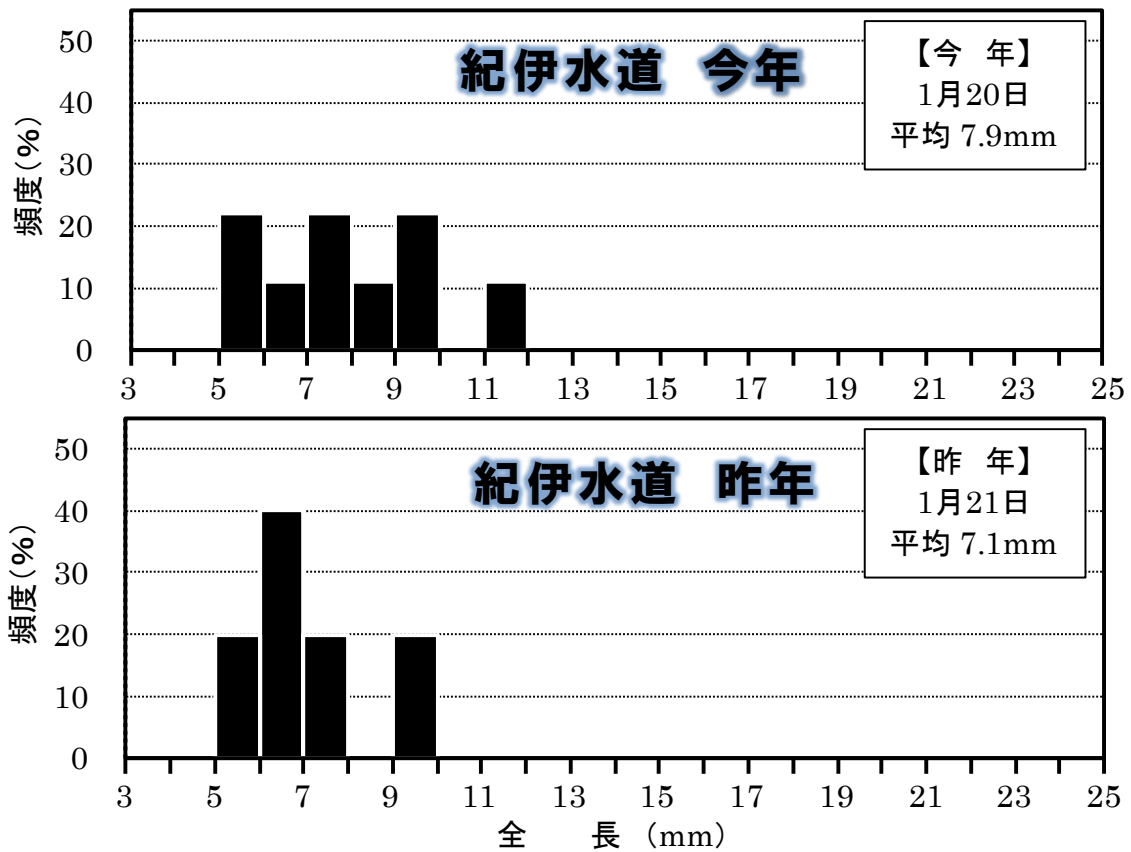


図6 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(紀伊水道)

3. 稚仔の成育の見通し

稚仔の成長速度は水温の影響を強く受け、水温が高いほど成長速度が速くなる。今年の明石海峡部の水温は、平年（平成 22～31 年の 10 年間の平均値）に比べ低め～平年並みで推移している（図 7）。

1 月 28 日に大阪管区气象台から発表された平均気温の 1 か月予報（寒気の影響を受けにくいため、向こう 1 か月の平均気温は高い）から判断すると、今後の水温は平年より高めに推移すると予測され、稚魚の成長速度も平年をやや上回ると考えられる。

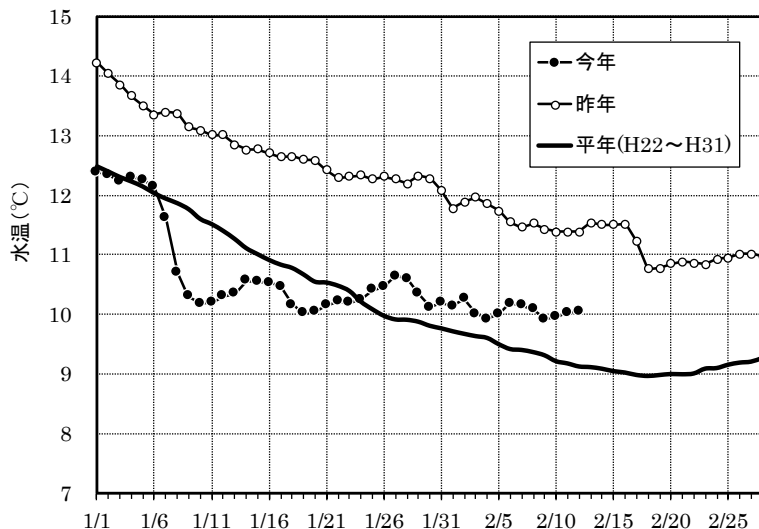


図7 明石海峡部1.5m層日平均水温の推移

4. シンコ漁の予測

昨漁期の漁獲量は、播磨灘、大阪湾、紀伊水道の3海域において平年(標本漁協における平成21~30年の10年間、2、3月のシンコ漁獲量の平均値)を下回り、播磨灘では一昨年を下回り、大阪湾および紀伊水道では、一昨年並みであった。

今漁期の産卵量や稚仔の分布量は、昨年と比較すると僅かに増加しているものの、平年と比較すると依然として低水準であることから、“今漁期のシンコ漁獲量は、3海域とも平年を下回る。”と予想される。

※) シンコの網おろし日は各地区漁業者の自主的判断によるが、過去の経験から網下ろしが早過ぎた場合には不漁になる可能性が高い。網おろし日の決定にあたってはこの点を十分に考慮する必要がある。

また、依然としてイカナゴの資源量が低水準であることから、翌年の漁獲量を増やしていくためには、これまで以上に産卵親魚を残すことを考慮した漁獲や網あげの取組が必要である。